

The Merchant of Venice における Bassanio について

村上 世津子*

(令和元年 10 月 31 日受理)

Bassanio in *The Merchant of Venice*

Setsuko MURAKAMI*

This paper discusses whether Bassanio is equal to Portia. Many critics think that Bassanio is not equal to her. First, many argue that the love test Bassanio takes is a fake, for the song gives the hints. But the song gives only hints, not the answer, and how he interprets it depends entirely on him.

Second, they argue, Bassanio says during the trial scene that he will sacrifice his wife to deliver Antonio. But that Bassanio thinks about sacrificing his wife only after he thinks about sacrificing himself indicates that her life is more important to him than his own life.

Third problem is that he gives the ring away to the doctor but tries to keep it secret. This seems to go against the spirit of the love test which tests whether he can hazard all for lead. However, when Portia is hardened, Antonio interferes and swears he will “be bound again: My soul upon the forfeit, that your lord/ Will never more break faith advisedly”(5.1.251-53). Since Antonio is Bassanio’s “bosom” friend, and he must needs be like him, Antonio’s words testify to Bassanio’s honesty. For all these reasons the present writer thinks Bassanio is equal to Portia.

Key words: Bassanio, Portia, Antonio, Shylock

1. はじめに

Portia は Bassanio の友人 Antonio が、Bassanio が Portia に求婚する費用を捻出するために Shylock から金を借りたが彼の船が難破して金を返せなくなったので借金のカタとして肉 1 ポンドを払わなくてはならないことを知るとすぐさま Antonio 救出のための行動に出る。Bassanio には相当の金を持たせて Venice に送り出し、彼女自身は博士に変装して Antonio の裁判を司るのである。彼女の行動力と知恵と夫及び夫の友人に対する思いやりは Portia が単なる金持ちの相続人であるだけでなく立派な気質を備えた夫人であることを証明するが Bassanio はどうだろうか。

1 幕 1 場で Bassanio は Antonio に金の羊毛を求めて Portia の下に参じる多くの Jason 同様、彼も Portia という金の羊毛を手に入れたい、Antonio に軍資金を出して貰えれば成

* 工学科(基礎教育・教養系)准教授
Associate Professor, Division of Fundamental Education and Liberal Arts, Department of Engineering

功できる自信があると言って、Bassanio が Portia に求婚するそもその動機は金銭目的であることを明言する。なるほど Bassanio は小箱のテストで正しい箱を選び取る。しかし間違った小箱を選んで敗れた Morocco や Arragon の時と異なり Bassanio が選択する時に Portia は音楽を奏でさせる：

One From Portia's Train: Tell me where is fancy bred,
Or in the heart or in the head?
How begot, how nourished?
All: Reply, reply.
One from Portia's Train: It is engendered in the eyes,
With gazing fed; and fancy dies
In the cradle where it lies.
Let us all ring fancy's knell:
I'll begin it: Ding, dong, bell.
All: Ding, dong, bell. (3.2.62-72)¹

この音楽の中で “bread” (62) “head” (63), “nourished” (64) は lead と韻を踏むので lead を選べと囁いているかのように解釈されうる (Halio 36)。さらには “eyes” (66), “dies” (67), “lies” (68) も韻を踏む。“lies” はここでは “to be in bed, and, in general, to pass time of night” (Schmidt, “Lie” vb. 2) という意味で使われているが “to utter falsehood intentionally” (Schmidt “Lie” vb. d) という意味もある。“eyes” と “lies” が韻を踏むことは、目は嘘をつくから見た目を選ぶなど言っているように解釈できる。“fancy” は目で生まれ「それが横たわるゆりかごで死ぬ」という歌の内容も見た目を選ぶことの危険を説いているように思われる (Halio 36)。これらの強力なヒントを得て Bassanio が lead の小箱を選んで果たしてそれが本当に Bassanio の内面の判断を反映するか怪しい。しかも Bassanio は裁判中に Antonio の命を救うためなら “life itself, my wife, and all the world” (4. 1. 281) を犠牲にしても良いと言う。さらに問題なのは “When this ring/ Parts from this finger, then parts life from hence” (3. 2. 183-84) という誓いにも関わらず Antonio の救出に尽力した博士にねだられると Portia の指輪をやってしまうことである。これだけ重要なマイナス要素を抱えていても Bassanio は Portia にふさわしい夫と言えるのだろうか。Acosta や Bloom は Bassanio は Portia にふさわしくないと考える (Acosta 54, Bloom 93)。他方 Barnett は正しい衝動に基づいて行動することが Bassanio の強みだと考える (Barnet 99)。Bassanio が Portia にふさわしい夫だと言えるとすれば何が Bassanio を Portia にふさわしくするのだろうか。本稿では Bassanio について考察する。

2. Portia の求婚の動機

Bassanio が Portia に求婚する動機の大きな部分が Portia の遺産にあることは確かであ

り、彼も羊毛を求めて世界各地からやってくる Jason たちと張り合い大きな幸運を手に入れたと思っていることは Bassanio 自身が明言するところである。しかし Bassanio の言葉を詳しく検討すると彼は決して Portia を Acosta が主張するように単なるモノと見なしている (Acosta 68) わけではないことが分かる。“In Belmont is a lady richly left” (1. 1. 161) という台詞には “And she is fair and, fairer than that word,/ Of wonderous virtues.” (1. 1. 163-64) が続く。金だけでなく容姿の美しさにも注目しているし、その容姿の美しさよりいっそう素晴らしい美德を持っていることを重要視している。“golden fleece” (1. 1. 170) や “Colchis’ strand” (1. 1. 171) や “many Jasons come in quest of her” (1. 1. 172) は求婚の目的が金銭的成功にあることを印象付けるが、その一方で “Her name is Portia, nothing undervalued/ To Cato’s daughter’ Portia” (1. 1. 165-66) とも言う。Brutus の Portia は志操堅固な女性として有名であり金持ちとしてではない。Merchant of Venice の Portia が行動力と知恵と思いを兼ね備えた女性であることが証明されるのは船が難破して Antonio が窮地に陥って以降である。劇の初めの段階で Portia を Brutus’ Portia に例えていることは Bassanio が Portia をモノ扱いにはせずに内面性も重視していることを示唆する。

Portia の virtue に言及する台詞を述べた後で Bassanio が “sometimes from her eye/ I did receive fair speechless messages” (1. 1. 163-64) と言うことも重要である。Bassanio は Antonio からの軍資金を手にして Portia に求婚に行こうと考えるが Bassanio は既に Portia に出会っている。Portia の父が存命中に Marquis of Montferrat と一緒に Portia に会っているのである。Nerissa はその時の Bassanio の印象を “He of all the men that ever my foolish eyes looked upon was the best deserving a fair lady” (1. 2. 114-16) と言い、Portia も Nerissa の称賛に賛成して “I remember him well, and I remember him worthy of thy praise.” (1. 2. 117-18) と言う。Portia に求婚する動機の一つとして Bassanio が Antonio に “Sometimes from her eyes/ I did receive fair speechless messages” (1. 1. 163-64) と言うことは 1 幕 2 場の Nerissa と Portia の称賛の言葉を踏まえたものだと思われる。Antonio に軍資金援助を願い出る時の締めくくりの台詞は他の Jason たちと張り合うイメージや “thrift” という語が “profit” の意味も帯びている (Halio 111) ことから金銭目当ての印象を与える：

O my Antonio, had I but the means
To hold a rival place with one of them,
I have a mind presages me such thrift
That I should questionless be fortunate. (1.1.173-76)

しかし本当に金銭目的ではなくて Portia の胸に秘めた思いが分かるという自負心からあえて金銭目的を前面に押し出しているのではないか。Bassanio は Antonio に多額の借金があつてその返済を済まさないうちにまた借金の申し込みをする。借金返済の役に立つと言った方が Antonio を説得しやすいと思ったのではないか。

3. Shylock と証文を交わすときの Bassanio

Antonio の承諾を得た Bassanio は早速 Shylock に金を借りに行く。Bassanio は喉から手が出るほど Shylock の金が欲しいが、利息を取らない代わりに違約した場合は Antonio の肉 1 ポンドをいただくという条件を提示すると、そのような証文に判をつくくらいなら窮状に甘んじている方が良いと言う。2 か月以内に証文に記された金額の 9 倍の金が戻ってくることになっている、証文の期限が切れるまで 1 か月の余裕があるから違約する恐れはないと Antonio に言われても納得しない。Shylock に “A pound of man’s flesh taken from a man/ Is not so estimable, profitable neither,/. . . /To buy his favour, I extend this friendship” (2. 1. 162-63; 165) と言われても得心できない。むしろ返済能力に自信のある Antonio は “I will seal unto this bond” (1. 3. 168) と言う。そして Shylock の言葉を額面通り受け取り “kind” (2. 1. 175) になったから “The Hebrew will turn Christian” (2. 1. 175) と言う。そこまで Antonio に安心を保証されても Bassanio は Shylock の姦計を疑い “I like not fair terms and a villain’s mind” (1. 3. 176) と言う。Bassanio は Antonio からだいぶ借りがあるにも関わらず派手な暮らしをしてすっかり失くしてしまい前の借金を返す前にまた Antonio に無心をするようなお調子者である。だが Maccoby の言葉に反して (Maccoby 240) 彼の借金が Antonio を苦境に落とす可能性がある時には念には念を入れて慎重になることは Antonio と Bassanio の関係が Iago と Roderigo のような搾取関係にあるのではなく Antonio の人格を尊重したものであることを示唆する。Bassanio は Antonio が心配であるからなるだけ早く戻ると言うし、逆に Antonio は Bassanio に成功して欲しいから次のように言う：

Slubber not business for my sake, Bassanio,
But stay the very riping of the time;
And for the Jew’s bond which he hath of me,
Let it not enter in your mind of love:
Be merry and enjoy your chiefest thoughts
To courtship and such fair ostents of love
As shall conveniently become you there. (2.8.39-45)

Antonio と Bassanio は深いところで通じ合っているから別れに際して Antonio は目に涙を浮かべて固い握手をするのである。

4. 箱選びの場面

4.1 Morocco の箱選び

Morocco や Arragon と異なり箱選びの場面で Bassanio には音楽のヒントが与えられるこ

とは確かである。しかし、もし Morocco にも同様のヒントが与えられたらどうであろうか。Morocco は Portia に会うと開口一番 “Mislike me not for my complexion” (2. 1. 1) と言う。そして肌の色が黒いからと言って北国生まれの色白の男と血の色で遜色ないと主張する。Morocco にとって内面と外面の違いに騙される恐れがあるのは Portia の方であって彼自身はだまされない絶対の自信を持っている。それにも関わらず鉛の箱には目もくれず金と銀の箱を天秤にかけ金を選び、敗れ去る。Morocco が箱を選ぶ時に Bassanio の箱選びの時に流れるのと同じ音楽が流れたらどうであろうか。韻は別にするとその音楽の内容は Morocco が初めから知っていることと同じである。音楽を聴いても Morocco の箱選びに影響は与えなかったであろう。それでは何故内面と外面の違いを誰よりもよく知っているはずの Morocco が箱選びに失敗するのだろうか。銀の箱の銘 “Who chooses me shall get as much as he deserves” (2. 7. 23) について吟味する時に Morocco は次のように言う：

I do in birth deserve her, and in fortunes,
In graces, and in qualities of breeding;
But more than these, in love I do deserve. (2.7.32-34)

Morocco 大公という地位を考えると “birth” や “fortune” や “breeding” の点で Morocco は Portia と釣り合いが取れているのは確かである。しかし “love” についてはどうであろうか。召使から大公が今宵到着されるという知らせを聞いた時に Portia は “If he have the condition of a saint and the compaction of a devil, I had rather he should shrive me than wive me” (1. 2. 126-28) と言う。Morocco は Portia の気持ちが彼に向っていないことに気づいていないのである。

金の箱の銘について吟味する時に Morocco は “What many men desire” (2. 7. 37) は Portia のことだと言い、その理由として “All the world desires her: / from the four corners of the earth they come / To kiss this shrine, this mortal breathing saint” (2. 7. 38-40) と言う。結局 Morocco が Portia を妻にしたいと思うのは彼女に対する愛、換言するならば一個の人格を備えた女性としての彼女に寄り添いたいという気持ちに由来するのではなく、衆人が求める女性、つまり高価なモノを手に入れたい気持ちに由来する。Morocco は鉛のために “hazard” (2. 7. 17) できないのは “Men that hazard all / Do it in hope of fair advantages” (2. 7. 18-19) だからだと言う。Morocco にとって妻は “advantages” をもたらず見込みのあるモノでなければならないのである。箱選びをする時に Morocco は次のように言っていた：

If Hercules and Lichas play at dice
Which is the better man, the greater throw
May turn by fortune from the weaker hand:
So is Alcides beaten by his rage;
And so may I, blind fortune leading me,

Miss that which are unworthier may attain,
And die with grieving. (2.1.32-38)

Morocco は箱選びを額面通り運試しとしか見なさない。Portia が箱選びに介入するのは Bassanio の時だけではない。実際には求婚を取りやめたので Portia が介入する余地はなくなったが Duke of Saxony's nephew が箱選びをするなら “set a deep glass of Rhenish wine on the contrary casket” (1. 2. 92-93) するように Nerissa に言う。Portia は父の遺言は守るが実施に際しては許されるぎりぎりの範囲で彼女のメッセージを伝えようとするのである。本心では Portia をモノ扱いしている Morocco は彼の気持ちを一方的に伝えるが、Portia の内なる声に耳を傾けようとはしない。だから Portia の方でもメッセージを送らない。箱選びが額面通りの運試しとなって Morocco は敗北するのである。

4.2 Arragon の箱選び

Arragon の箱選びに Bassanio の箱選びと同じ音楽が流れてもやはり結果は変わらなかったであろう。Morocco 同様 Arragon も外観と内面の違いの重要性を認識しているからである。彼は金の小箱の銘を読んだ時に “what many men desire” (2. 9. 223) の “many” は “the fool multitude that choose by show,/ Not learning more than the fond eye doth teach” (2. 9. 25-26) のことだと言う。つまり彼自身は “fool multitude” と違って見せかけに騙されるような愚か者ではないと自負しているからである。それにも関わらず鉛の小箱の銘を読むと “You shall look fairer ere I give or hazard” (2. 9. 21) と言う。Arragon は、自分は “fool multitude” と違うという思いが強くと自分の地位や力量に絶対の自信を持っていて他者の判断に耳を貸そうとしない。己の力を頼みすぎるから Arragon は箱選びに失敗する。

4.3 Bassanio の箱選び

Bassanio の求婚については箱選びを単なる運試しだとは考えない。箱選びの背後に存在する Portia の意向を尊重するから、換言するならば Portia をモノと見なさず一個の人格を備えた存在と見なすから彼女の気落ちを引き、彼女を取り巻く人たちの印象を良くする術を考えて “besides commends and courteous breath,/ Gifts of rich value” (2. 9. 89-90) を送る。Portia は Bassanio に恋心を抱き始めるからまずは一緒にいられる時間を少しでも稼ぐために運命の日を遅らせようとする。そしてそれが叶わなくなると箱選びをする間に音楽を流してヒントを与える。Bassanio を箱選びに送り出す前の Portia の台詞 “If you do love me, you will find me out” (3. 2. 41) は箱選びが単なる運試しではなくなっていることを示唆する。歌が終わるや否や Bassanio は “So may the outward shows be least themselves” (3. 2. 73) と言う。ここでの “So” は 3 幕 2 場 67-69 行の歌の内容を指しているように思える。これは Bassanio が外見の美しさは内面を裏切るかもしれないことのヒントを歌から得たことを示唆する。しかしだからと言って Portia が Bassanio に答えを教えたわけではない。音楽の意義について Portia は成功した場合と失敗した場合に分けて考えて成功した場合は新たに王冠をいただいた王の前に忠臣たちが平伏す時、華やかに吹き鳴ら

されるトランペットの働きをし、失敗した場合は白鳥の最後のように楽の音に包まれて姿を消すためだと説明する。Portia は音楽を奏でたからと言ってそれをどう判断するかは Bassanio 次第であることを知っている。韻や歌の内容に気づかないかもしれないし、気づいても箱選びと結びつけるかは分からないからである。だから箱選びを見ている Portia の胸は箱選びをする Bassanio よりも不安でいっぱいなのである。Bassanio が歌に反応するのは一方的に自分の気持ちを押し付ける Morocco や自分は “fool multitude” ではないと思いい自分の力に頼みすぎて相手の気持ちを考えない Arragon と異なり相手からのメッセージに耳を傾けようとする謙虚さを身に着けているからであろう。

5. Antonio の窮状を知った時の Bassanio

Bassanio は正しい小箱を選び Portia を手に入れるや Antonio からの手紙で彼の窮状を知る。親友の窮状を知ると Bassanio は正直に彼の求婚と Antonio の窮状の関係について語る。すなわち Portia に初めて愛を打ち明けた時に Bassanio は無一文の身だと言ったが実は無一文以下であり Portia の下に来る費用を賄うために親友に金を借りたが親友はその費用を捻出するためにユダヤ人の高利貸しから金を借りた。親友の船はことごとく難破したので借金を返済できなくなった旨を正直に語る。そして Portia に促されると Antonio からの手紙を読み “[his] bond to the Jew is forfeit; and since in paying it, it is impossible [he] should live” (3. 2. 315-16) ことをはっきり述べる。

この時点の Bassanio は箱選びのテストに合格して Portia から指輪とともに “Myself and what is mine to you and yours/ Is now converted” (3. 2. 166-67) と言われてはいるがまだ結婚はしていない。Portia の父の遺言の枷があるとは言え条件が大きく変わると破談になる可能性は十分にある。最初 Portia に手紙の内容を聞かれた時に Bassanio は正直に答えるけれどもその答えは極めて抽象的であった。Bassanio は Antonio からの手紙のことを “And every word in it a gaping wound / issuing lifeblood” (3. 3. 263-64) と説明する。“gaping wound” や “life-blood” は期日までに借金が返済できなかった場合、Antonio はカタとして肉 1 ポンドを支払わなくてはならない。肉 1 ポンドを支払う時に切り裂かれる傷が “gaping wound” であり、その時に流れる血が “life-blood” である。Bassanio の頭の中ではこれらの語が何を指すかは明瞭であるし、Shylock との契約の場面を見知っている観客にも理解できる。しかし Antonio と Shylock の間でどんな契約が交わされたかを知らない Portia には抽象的で理解しにくい言葉である。だから Portia は Bassanio に Antonio からの手紙を読むことを求める。Bassanio が抽象的な言葉でしか語れないのは 1 つには事の重大さに頭が錯乱しているからであるが、もう 1 つの理由はありのままを述べて Portia に軽蔑されることが怖いからできれば曖昧模糊としたままにしておきたいという気持ちが働くのではないか。Portia に促されて手紙を読むのはその気持ちに打ち勝ち自ら蒔いた種の責任を取ろうとする気持ちの表出であろう。Antonio は “If your love do not persuade you to come, let not my letter” (3. 2. 319) で手紙を締めくくる。Bassanio は Antonio からの手紙を無視することができたかも知れない。親友からの手紙に向き合い、Portia の助けを得てすぐさま Antonio

救出に駆け付けるところに Bassanio の誠実さが表れていると言えよう。

6. 裁判の場面で妻を犠牲にしても良いと叫ぶ Bassanio

妻の許しを得た Bassanio は即座に Antonio の裁判の場に駆け付ける。まずは Shylock と掛け合い、好きになれなきゃ殺すと言う Shylock の考えは間違っていることを論破しようとするが、Shylock は聞く耳を持たない。Shylock の人間性に訴えかけても詮無いことを知ると次は金の力に訴えかけ 3000 ダカットの借金を倍返しにすると提案する。Antonio は早々に Shylock と問答しても無駄だと諦めるが Bassanio は Antonio を元気づける：

Good cheer, Antonio! What, man, courage yet!
The Jew shall have my flesh, blood, bones, and all
Ere thou shalt lose for me one drop of blood. (4.1.110-12)

Bassanio は Antonio が死ななければならない大元の原因を作ったのは自分であることを認識している。裁判の席上で Shylock の前で彼自身の命を引き換えにしても Antonio の命を守ると公言することは Bassanio の責任感の強さを観客に訴える。だが Bassanio の切り札と思える発言にも Shylock は動じない。それどころか Bellario 博士のところから来た法学博士の慈悲を説くセリフにも反応しない。Bassanio は改めて 2 倍で不足なら 10 倍にしても借金を返す、それでも不足なら彼の手や首や心臓を抵当にして支払うと主張するが、それでも Shylock は反応しない。そこで Bassanio は博士に法を曲げることをお願いするがそれは許されないと告げられる。Antonio の死がほぼ確実になり Antonio が Bassanio に別れの挨拶を済ませると Bassanio は次のように叫ぶ：

Antonio, I am married to a wife
Which is as dear to me as life itself;
But life itself, my wife, and all the world
Are not with me esteemed above thy life.
I would lose all, ay, sacrifice them all
Here to this devil, to deliver you. (4.1.279-84)

Antonio を取るか妻を取るかの選択で Antonio を取ると宣言するのは妻に対する裏切りである。Blanchard は Bassanio が Antonio を救うために妻を犠牲にすると言うのは Shylock が Jessica の死を望むことが paternal affection に反するように conjugal love に違反すると述べる (Blanchard 22)。現に Portia は傍白で “Your wife would give you little thanks for that / If she were by to hear you make the offer” (4. 1. 285-86) と言う。しかしここで wife の説明として Bassanio が “which is as dear to me as life itself” と言うことは注目に価する。“as dear to me as life itself” であることは Bassanio にとって妻は一心同体の存在だからで

ある。さらには順番も重要である。BassanioはShylockと駆け引きする時に借金の倍返し、3倍返し、10倍返しをする、それでもだめなら彼自身の肉や血や骨をくれてやると言った。BassanioはShylockが承諾しやすいようにAntonio救出の対価を徐々に引き上げていく。Bassanioが妻を犠牲にすることを口にするのが彼自身の命を犠牲にするとした後であることはBassanioが自分の命よりも妻に価値を見出していることを示唆する。

7. 指輪を博士に与える Bassanio

博士の尽力でAntonioを救出してもらったBassanioは博士にお礼をしようとする。最初はShylockに返すはずであった3000ダカットの金を送ろうとするが辞退されて代わりに記念の品としてBassanioがつけていた指輪をねだられる。“when this ring/ Parts from this finger then parts life from hence” (3. 2. 183-84)と誓って受け取った指輪である。困ったBassanioは、最初は安物だから恥ずかしいと言ってごまかそうとするが是非にと頼まれる。今度は広告を出してVenice一高価な指輪を見つけると約束するが納得してもらえない。そこでその指輪は妻からの贈り物でその指輪をはめてくれる時に売りも譲りも失くもしないと宣言したことを告白するがそれでも納得しない。そしてそんなことを言うのは指輪をやりたくない口実だ、奥さんが気違いなら別だがまっとうなら博士の尽力を知ればいつまでも恨みに思わないだろうという捨て台詞を吐いて立ち去る。Antonioにもその指輪を上げてくれとお願いされるとBassanioはGratianoをして博士に指輪を届けさせる。Kaplanが指摘するようにBassanioとGratianoが指輪を上げることを選択することは妻に対する裏切りである(Kaplan 288)。

この時点ではAntonioは既に救出されている。博士もBassanioの出し惜しみを非難するだけで結局は指輪なしで立ち去るのだからBassanioがPortiaとの約束を優先してもAntonioの命に別状はない。しかし裁判の場面で彼自身の命に代えても彼の命よりも愛しい妻を犠牲にしてもAntonioを守ると主張したBassanioの誠実さには疑問符が付く。BassanioがPortiaに求婚できたのはAntonioが命を張ってShylockから借金をしてくれたお陰である。Antonioの窮状を聞いた時にPortiaが即刻BassanioをVeniceに送り出し、彼女自身は博士に変装してAntonioを救出することは“*And know how well I have deserved the ring/ she would not hold out enemy for ever/ For giving it to me*” (4. 1. 442-44)という博士の台詞は的を射たもののように思われる。ここでBassanioがPortiaではなくてAntonioを優先するのは妥当な選択のように思える。問題はAntonioを選択する時にBassanioはPortiaとの関係にひびが入りうることの重みを引き受ける覚悟をした上で選択しているかどうかである。

8. 指輪を失くしたことを告白する Bassanio

Bassanioら一行がBelmontに戻ると早速GratianoとNerissaの間で喧嘩が起こる。GratianoがNerissaにもらった指輪を博士の書記にやってしまったことにまつわる喧嘩で

ある。この喧嘩を耳にした Portia が Gratiano を非難し Bassanio ならたとい世界中の富と引き換えにしても指輪を人にくれてやったりはしないと云うのを聞くと Bassanio は “I were best to cut my left hand off/ and swear I lost the ring defending it” (5. 1. 177-78) と云う。これは Bassanio が彼のした選択の重さに向き合わずにごまかして Portia との結婚生活と Antonio の命の両方を手に入れたい気持ちの表出である。父の遺言によるテストだったとは言え、小箱のテストで Bassanio が試されていたのは鉛のためにすべてを擲つことができるかであった。ごまかして両方を手に入れようとする態度はこのテストが測ろうとした冒険心からほど遠い。この台詞を吐く時の Bassanio は Portia の夫にふさわしくないと云えるだろう。

だが、Gratiano が Bassanio も指輪を上げてしまったことを告げると Bassanio は嘘を重ねることを避けて正直に人に譲ってしまったことを告白する。ただし Bassanio は告白してもそうせざるを得なかった事情を説明もしなければ謝罪もしない。だから Portia は Bassanio の態度を不実だと非難してベッドを共にしないと宣言する。Bassanio はあの指輪を誰に何のためにやったか、どんなつらい思いでやったかを分かってもらえば機嫌を直してもらえるはずだと言う。Bassanio の弁明を聞いて Portia もあの指輪に込められている愛、送った女の価値、指輪をつけることは名誉だということが理解できれば送らなかったはずと言い返す。Bassanio にも言い分があることは確かだが、Portia を取るか Antonio を取るかの選択で Antonio を選んだのは Bassanio である。本来なら許してもらえないことも覚悟の上で Portia に問われる前に “You are welcome home, my lord” (5. 1. 132) と云われて “I thank you, madam” (5. 1. 133) と答えた直後に指輪を人にやった理由を説明して許しを請うべきであった。Bassanio がきちんと事情を説明し許しを請うのは Portia に指輪を女にやったに違いないと言われた後である。事情を説明して許しを乞うても Portia の態度が頑なで “I will become as liberal as you./ I’ll not deny him anything I have./ No, not my body nor my husband’s bed” (5. 1. 226-28) と主張すると Antonio が介入する。彼は彼の命を一度は抵当に入れた。もしあの指輪を受け取った男がいなかったなら今頃は死んでいただろう。今度は魂を抵当にしてご主人は二度と誓言を破らないと誓うと言う。Antonio は Bassanio のために大変な難儀にあったにも関わらず抵当額を上げてまで Bassanio の幸せのために保証人になると言う。Antonio の誠意にほだされた Portia は博士に変装していた時に Bassanio から受け取った指輪を Antonio に渡し、前のよりも大事にするように言ってほしいと言う。

3 幕 4 場で Antonio の窮状を知った時に彼の救済に尽力する理由を Portia は次のように説明した：

;for in companions

That do converse and waste the time together,
Whose souls do bear an equal yoke of love,
There must be needs a like proportion
Of lineaments, of manners, and of spirit,

Which makes me think that this Antonio,
Being the bosom lover of my lord
Must needs be like my lord. (3.4.11-18)

“bosom lover of my lord”である Antonio が “Must needs be like my lord”であるならば Antonio が Bassanio の Portia に対する忠誠を信じて魂を抵当に入れてまで Bassanio の保証人になると言明することは Portia に対する忠誠を誓う Bassanio の言葉がそれだけの重みを持つ言葉であることを示唆する。だから Antonio が彼の魂を抵当に入れてまで Bassanio の保証人になると言う時に Portia は Bassanio の誠実を信じるのである。

9. 結び

劇の初めで Bassanio が Portia に求婚するのは多分に金銭的目的があった。求婚する時に Bassanio は無一文であるがありのままの姿で Portia に求婚するのではなくて Antonio から軍資金を得て求婚者にふさわしい姿を装う。Portia の取り巻きの心を動かす要因の一つは “besides commends and courteous breath,/ Gifts of rich value” を用意することである。しかしだからと言って Bassanio は Portia をモノ一彼が Antonio の借金を返済し金持ちになるための道具一と見なしているわけではない。Bassanio は Portia の容姿の美しさにも注目しているしその容姿の美しさよりもいっそう素晴らしい美徳の持ち主であることを重要視しているのである。Portia の取り巻きの心を動かすのが “Gifts of rich value” であるにしても Bassanio が Portia に会うのは Antonio の軍資金を得て求婚に行く時が初めてではない。Portia の父が存命中に Marquis of Montferrat と一緒に会っていてその時に Portia に好印象を植え付けている。なるほど小箱のテストでは他の求婚者たちと異なり Bassanio には音楽のヒントが与えられる。しかしたとい他の求婚者に同様のヒントが与えられたにしても彼らが Bassanio のように反応したかは疑問である。Morocco も Arragon も己の力を頼みすぎていて他者の声に耳を傾けようとはしないからである。Bassanio が箱選びに成功するのは箱選びを単なる運試しと見なさずその背後に存在する Portia の意向を尊重するからである。

よりいっそう問題なのは裁判の場面で Antonio を取るか妻を取るかの選択で Antonio を救うためなら妻を犠牲にすると口にするのである。しかし Bassanio にとって妻は “as dear to me as life itself” である。それどころか自分の命を犠牲にしても足りない時に初めて妻を犠牲にすると口にするのは自分の命よりも大切な存在だと考えていることを示唆する。さらに問題なのは指輪を博士にお礼としてあげてしまうのに Portia に問われるまでその説明をきちんとしないでごまかそうとすることである。小箱のテストで Bassanio が試されていたのは鉛のためにすべてを擲つことができるかであったのにごまかして両方を手に入れようとする Bassanio の態度は小箱のテストの精神に反するように思える。しかし Portia に指輪を女にやったに違いないと言われた後は、Bassanio はきちんと説明して許しを請う。

事情を説明して許しを乞うても Portia の心が頑なな時に Antonio が介入して今度は魂を抵当にしてご主人は二度と誓いを破らないと誓うと言う。“bosom lover of my lord”である Antonio が “Must needs be like my lord”であるならば Antonio が Bassanio の Portia に対する忠誠を魂を抵当に入れてまで保証すると誓うことは Portia への忠誠を誓う Bassanio の言葉がそれだけの重みをもつことを示唆する。以上から Bassanio は Portia の夫にふさわしい人物だと言える。

注

1. テキストは Shakespeare, William. *The Merchant of Venice* ed. Jay Halio. Oxford: Oxford UP, 1993 を用いた。

引用文献

- Acosta, Elizabeth Valdez. “Open Doors, Secure Borders: The Paradoxical Immigration Policy of Belmont in *The Merchant of Venice*.” *Shakespeare and Immigration*. Farnham: Ashgate, 2014.177-98. Rep. In *Shakespearean Criticism*. Ed. Lawrence J. Trudeau. Vol. 167. Mich: Gale, 2016. 60-73.
- Barnet, Sylvan. “Prodigality and Time in *The Merchant of Venice*.” *PMLA* 87.1 (1972): 26-30. Rpt. In *Shakespearean Criticism*. Ed. Lawrence T. Trudeau. Vol 151. Detroit: Gale, 2013.97-101.
- Blanchard, Jane. “Contesting Constancy in *The Merchant of Venice*.” *Renascence* 61 (2009): 209-20. Rpt. In *Shakespearean Criticism*. Ed. Lawrence J. Trudeau. Vol. 167. Mich: Gale, 2016.18-24.
- Halio, Jay L. ed. *The Merchant of Venice*. By William Shakespeare. 1993. Oxford: Oxford UP, 2008.
- Kaplan, M. Lindsay. “Jessica’s Mother: Medieval Constructions of Jewish Race and Gender in *The Merchant of Venice*.” *Shakespeare Quarterly* 58 (2007):1-30. Rpt. In *Shakespearean Criticism*. Ed. Michelle Lee. Vol. 142. Detroit: Gale, 2012.280-94.
- “Lie.” *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*. By Alexander Schmidt. 3rd ed. New York: Dover, 1971.
- Maccoby, Hyam. “Shakespeare and Shylock.” *Antisemitism and Modernity: Innovation and Continuity*. London: Routledge, 2006. 97-107. Rpt. In *Shakespearean Criticism*. Ed. Michelle Lee. Vol. 123. Detroit: Gale, 2009. 238-43.
- Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*. Ed. Jay L. Halio. 1993. Oxford: Oxford UP, 2008.